

6月23日（火）「平和の尊さを考える 平和学習」

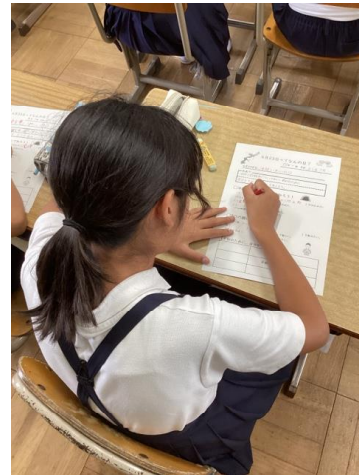
各学年で、沖縄戦についての平和学習を行いました。平和に関する動画や写真、紙芝居などを活用し、戦争の悲惨さや平和の尊さについて学びました。子どもたちは、一人一人が平和について真剣に考え、自分にできることは何かを見つめる貴重な時間となりました。

学習の中では、「ひいおじいちゃんやひいおばあちゃんから戦争の話を聞いたことがあります。」と話してくれる子どもたちもたくさんいました。戦争の痛みや悲しみ、そして二度と繰り返してはならないという平和への願いが、ご家庭でも大切に語り継がれていることに、胸が熱くなりました。

今回の学習を通して、自分自身を大切にすること、そして周りの人を思いやり、大切にすることの意味を改めて考える機会となりました。これからも平和への願いを受け継ぎ、子どもたちとともに平和の大切さについて学び続けていきたいと思います。

～子どもたちの思いや考え等～

- ・せかいのみんなが、へいわがいいです。ぜったいに、せんそうをしたくありません。へいわになってほしいとおもいます。
- ・かぞくといっしょにすごせることや、ともだちといっしょになかよくすごせることが、たいせつだとおもいました。
- ・言葉を大事にすることや家族や友達など周りの人を大切にすることが、平和につながるとおもいました。
- ・戦争は、ぜったいにしてはいけないし、一人一人の命を大切にすることや周りの人に感謝することが大切だと改めておもいました。
- ・事実をしっかりととらえ、戦争のときの人々の思いや考えを知ること、自分たちが、平和を未来へつないでいかなくてはいけないと思った。
- ・平和の詩を聴いて、戦争は、まだ終わっていないことや、今の沖縄に住む人の気持ちも考えることができた。平和について、もっと考えていきたい。
- ・戦争は、みんなの暮らしや家族、友達といった大切なものや人を奪うものだと思いました。平和について自分ができることを、しっかりと考えていきます。
- ・たくさんの人数の人が亡くなり、今でも苦しんでおられる方がおられる。戦争は、ぜったいにしてはいけない。平和について学んだことや自分が考えたことを忘れずに、これからも、戦争の悲惨さや平和の尊さ、大切さを学びたい。もう二度と戦争をせずに、平和に生活することが大切だと思った。



「生きたいと願った証」 沖縄戦没者追悼式で朗読の平和の詩

あの日の沖縄には
青い海も
優しい風もなかった
空は黒く
地面は揺れ
人々の叫び声が絶えなかった
爆撃の音が
心まで壊していく

まだ若かった曾祖母は
小さな体で必死に走った
血だらけの道を
倒れた人たちの横を
もう動かない人を見ながら
涙を流す暇もなく
ただ生きるために
愛する夫の命を案じながら
「お願い 生きていて」
その想いだけを胸に
足がもつれても
呼吸が苦しくても
転びそうになっても
前へ前へと走った
しかし
その願いは
もう二度と届かなかった

その時のことを話す曾祖母の声は
今でもとても優しい
でも 私は知っている
その優しい声の奥に
今も消えない悲しみがあることを
細い足
しわしわの手
小さな背中

長い年月を生きてきたその姿を見るたび
私は戦争の重さを感じる
そして
曾祖母の右足には
今も傷が残っている
それは
戦時中 自分で引っ掻いた傷
灰色の空の下
爆撃の音が鳴り響く
恐怖と不安でいっぱいになり
右手に握った石で
自分の右足を何度も何度も引っ掻く
気づけば手も足も血だらけだった

私が真実を知った時
胸が締めつけられた
どれほど怖かっただろう
どれほど苦しかっただろう

生きたい
死にたくない
その思いだけで
曾祖母は必死に生き延びた

戦争は人を傷つける
体だけじゃない
心まで壊してしまう
家族と笑う時間
友達と過ごす日々
「また明日ね」と言える幸せ
そんな当たり前を
全て奪ってしまう
でもそれは
当たり前なんじゃない
血と涙の中を生き抜いた人たちが
命を繋いでくれたから
今の私たちはいる

もし曾祖母が
あの日 走っていなかったら
もし
あの日 命を落としていたら
私はここにいなかった
曾祖母の右足の傷は
ただの傷じゃない
「生きたい」と強く願った証
「戦争は二度としてはいけない」
という叫び
私はその想いを
これから先も伝えていく
もう誰にも
血だらけの道を
走ってほしくないから
もう誰にも
愛する人の命が奪われることに
怯えてほしくないから
もう二度と
沖縄の空を戦争で
染めてはいけないから

平和は当たり前じゃない
たくさんの人の涙と苦しみと
「生きたい」という願いの上にある
だから私は忘れない
沖縄戦で苦しんだ人たちを
愛する人を守ろうとした想いを
泣きながら生き抜いた人たちを
そして
曾祖母の右足の傷を
「生きたい」と願った証の傷を
平和な未来へと繋いでいくために